

# 仏教文化公開講座講演録要旨

## お釈迦さまから阿弥陀さまへ

丘 山 新

今日は、「お釈迦さまから阿弥陀さまへ」というテーマでお話しします。浄土真宗の教えとお釈迦さまの教えがどういう関係にあるのか。いわゆる真宗の教理学的な理解の仕方ではなく、仏教学、文献研究の立場からどのように考え得るのかということで、お話ししたいと思います。

ところで、日本では仏教書がたくさん売れます。講演会に来る人も多い。しかし、それ止まりという人が圧倒的に多く、その一歩先がない。その意味で私は、日本の仏教はカルチャー仏教だと思っています。阿弥陀さまのお話を聞いたあと、ちょっとお寺に行つて、「南無阿弥陀仏」でも唱えてみようかという行動につながらない。残念なことです。聞くだけでなく、本当に生活の中に生きた仏教になつてほしい。私たち一人ひとりが、仏教を学ぶことで、自分の行き方にストレートに反映されていくような、そういう関心で仏教のことに興味をもってもらえたらありがたいと思うのです。私も、以前は大学の仏教研究者でしたが、今は一人の宗教者として、皆さんとともに生きた仏教を学んでゆきたいと思っています。

まず、お釈迦さまの話をしましょう。お釈迦さまの「釈迦」は釈迦族。「釈尊」は、釈迦族の尊者、貴き人です。「シャーキャ・ムニ」と言います。「シャーキャ」は一族の名前で「ムニ」は「尊」、尊いお方ということです。今日は親しみを込めて、「お釈迦さま」と呼ばせていただきます。

お釈迦さまは、大体、今から二千五百年前の方です。その頃の日本は、縄文式から弥生式に入っていますが、まだ文字を持っていません。当時、お釈迦さまがどんなことを考えていたのか。インドにはお釈迦さまが誕生するずっと以前からいろいろな宗教思想がありました。そういうインド古来の思想的、哲学的背景の中から、お釈迦さまが登場して来るのです。

お釈迦さまは、「人生は苦だ」と考えました。なぜ人生は苦しみだと考えたのでしょうか。言い伝えによると、お釈迦さまは小さな国の王子として生まれたと言われますが、王子というより、ネパールのほうの小さな村の村長の息子という感じが正確ではないでしょうか。

それなりに裕福な生活をしていたのですが、彼が「人生は苦だ」という考えにいたる、有名な「四門出遊」という伝説があります。あるとき、宮殿から、東の門を出てみると、病気になって苦しんでいる人がいる。南の門を出てみると、年老いていくことを嘆いている人がいる。西の門から出てみると、まさに死にゆく人がいて、人生は本当に苦しみなんだと感じた。さて、北の門を出ていくと、修行者が一生懸命そういう苦しみを克服しようとしている。この四つの門から見た光景から、「人生は苦だ」という考えが心に生まれ、ついに決断して、二十九歳のときに出発するのです。

お釈迦さまは、人生は苦だと感じ、そこからいかに苦しみを乗り越えていこうかと、いろいろな修行をしました。經典に沿っていくなら、彼は六年間いろいろな苦行をしたり、瞑想をしたりして、三十五歳のとき、「菩提樹」と名

付けられる木のもとに座って瞑想中に悟られたということです。

悟られたというのは、何か言葉で表現できるようなことではありません。わかりやすく言うと、頭がぱっと明るくなった。私たちは、何かものを見ているようだけれども、ちゃんと見えていない。それを「無明」と言います。無明、明るくないというのは、智慧の光がない。宗教的叡智は、感覚的には光のイメージです。英語はいろいろな訳し方がありますが、「悟る」は「enlighten」、明かりがつくと言います。「The Enlightened One」が、悟った人、明かりがついた人で、知が開発されて、智慧のまなこが解得された人です。その智慧の目で世界を見たら、世界はこうなっているというふうに見えたのです。それが、「十二支縁起」です。

簡略に言うなら、「老病死」、年老いたり、病んだり、死んだりしていく、そういう苦しみはなぜあるのか、それは、この世界に生まれたからだ。生まれるとはどういうことなのか。原因を探っていくと、存在というものがあるからだ。「十二支縁起」はいささか難解な理屈なのでいちいちご説明はしませんが、ここで大事なのは「愛」です。これは私たちが普段使う愛とは違って、「渴愛」と言います。のどが渴けば、人は水が欲しい。そういう渴き、渴愛というのは、欲しく欲しくてしょうがなくて欲望に心身が焦されている状態。その欲望の塊、渴愛が一つの大きなポイントです。そこからさかのぼって原因をたどっていくと、最後の無明にいたる、ということなのです。

私が一番適切だと思っているのは、生きるときの本当の根っこにある人間の愚かさが無明ということなのだろうと。本当の愚かさというのは、例えば、誰でも人は人を殺してはいけないと思っっている。それなのに、戦争をして人を殺してしまう、殺さざるを得ない。このような矛盾した考え方、葛藤、それが人間の本当の愚かさだと思えます。

お釈迦さまは、世界はそういうふうになっている、あるいは、人間の苦しみというのは、人間の本当の愚かさにある。だから、愚かさを克服して、無明を明にひっくり返してしまえ。そのために修行しよう。結果、無明が明に転化し

たのがお釈迦さまです。それが、彼の宗教的叡智、すなわち明（みょう）、ビディヤーです。あとでお話する大乘仏教では、これを般若、プラジュニヤーと言います。

次に「四諦」についてお話します。「諦」は、普通に訓読みすると「あきらめる」です。この「諦める」の元々の意味は、明らかにする、ということ、明らかにされたものが真理です。つまり四諦は四つの真理。「苦諦（くたい）・集諦（じつたい）・滅諦（めつたい）・道諦（どうたい）」です。苦諦は、苦に関する真理。集諦は、苦しみの原因に関する真理。滅諦は、苦しみ、欲望をなくして、本当に静まりかえるという真理、涅槃に関する真理と言えます。道諦は、欲望をどういう順番で克服していくか、無明を克服していくか、その筋道のことです。

ここで、問題にしたいのは集諦です。集諦のもともとの意味は、原因です。苦諦は、人生は生老病死、苦しみたという人生の真理。集諦は、人生の苦しきは渴愛にあるという真理。ここでは「燃え盛る欲望」と表現しておきます。インドでは、欲望は、燃えている感じですが。その燃え盛る煩惱、欲望の火を消してしまえ。それが「涅槃」という言葉です。涅槃は、サンスクリット語というインドの古い言葉で言うと、「ニルヴァーナ」。もう少し違う地方語で言うと、「ニッバーナ」。欲望が吹き消された理想の状態が「涅槃」です。

少し脱線しますが、いろいろな悩みを持っている人は、悩みを書き出して、あるいは頭の中できちんと整理して、一番深刻な悩みに取り組む。ほかの悩みはどいてもらって一番切実なものだを選ぶのがいいかもしれません。一つだけやつつけていく。解脱や涅槃に役に立たない議論を戯論（けろん）と言いますが、お釈迦さまが言っているのは、戯論はやめましょうと。世の中、いろいろな仏教書が多いですが、戯論が多く、それを読んで悟った人は誰もいません。

ちなみに、私も、大学で仏教を勉強し始めて二年ぐらいたら、「いや、こんなところで勉強していても悟れ

ないな」と思っ、やめようと思いました。私の師匠の玉城康四郎という先生はすごい人で、奥さまに言わせると、「うちの旦那は、寝ているか、瞑想しているか、どっちかだ。それでいながら、書いた本はこんなだ」と。彼に相談したら、「君、短気を起こしたらだめだ、学ぶことと信仰は車の両輪みたいなもので、互いに保証し合う。ただ、今の学問は、実践が全く欠落しているから、そこはきっちり実践と学問でやっていきなさい」と言われました。

ところで、「煩惱」という言葉はよく聞くでしょうから、それだけは説明しておきます。煩惱の代表選手は三つあり、「貪(とん)・瞋(じん)・癡(ち)」です。「貪」は、何か欲しい欲しいと思う貪りのこと。「瞋」は、怒りです。みなさん、怒ると心がけられる、汚れる、そんな気がしませんか。もともと、そんなにきれいなじゃなくても、さらに汚くしてしまう、透明でなくしてしまう、濁らせてしまう。怒りというのは、非常にそういう作用が強いのではないか。

次に「癡」は、無明に近いことで、本当に愚かな私たちの在り方です。苦しみをもたらす根っこは、欲望、渴愛が一つ。もう一つは、さらに根っこの本当の愚かさ、人生の本当の生き方が、私たちにはまだ見えてないという愚かさです。苦しみをもたらす原因はその二つです。

次に「四苦八苦」を考えてみます。「生・老・病・死」の四苦はわかりますね。五つ目は「求不得苦(ぐふとつく)。「求」は欲しい、「不得苦」は得られない、そういう苦しみ。六つ目が「怨憎会苦(おんぞうえく)」、七つ目が「愛別離苦(あいべつりく)」、八つ目が「五蘊盛苦(ごうんじょうく)」です。五蘊盛苦は、存在が苦しみだという話で思想的なので置いておきます。

怨憎会苦の「怨憎」は嫌なやつ、憎たらしいやつ、「会」は会う、嫌な人と会いたくないのに会わないといけない苦しみ。その逆の愛別離苦は、愛しい人たちと別離しなくてはならない苦しみです。これらは人間関係の苦しみ、と言える

でしょう。二千五百年前の人がこんなことを考えたのは驚きです。人間の苦しみは二、三千年前と変わらない。お釈迦さまはそれを見抜いています。

さて、お釈迦さまが特別なのは、この人間関係は苦をもたらすから、解脱するには人と付き合うな、とおっしゃったことです。解脱は、苦しみから解放されるという意味です。解脱とか涅槃を目指す人間、修行者は、なるべく人と付き合うな、ただ一人歩みなさいということです。人間関係に関して、とても否定的です。

お釈迦さまは、三十五歳で悟ったときに、自分が解脱しよう、涅槃に達しようと頑張つて、それは実現した。これでよし、なすべきことはなし終えた、あとは肉体が減ぶ完全な涅槃、パリニルヴァナを待つだけだと考えた。それを誰かに伝えようとは思いませんでした。お釈迦さまは、そのあと何度も一週間ごとに瞑想を繰り返します。ここで私が不思議に思うのは、彼が途中で迷ったということです。悟った人が迷う、悩むとはどういうことだろう。何を悩んだかという、人に説くかどうか。このことです。

この悩みの最中に「梵天勸請（ぼんでんかんじょう）」というエピソードが出てきます。梵天という神さまが降りてきて、どうか説いてくれと懇願する。お釈迦さまは、人々を見て、みんな欲望を貪っているから説いても疲れるだけだと言う。梵天は、めげずに、三度、頼みました。この三度、というのは特別な数字のようで、なぜか人は三回頼まれると拒否はできないようです。そこでお釈迦さまは、とうとう説こうという気持ちになった。しかし、これは出来過ぎの話ではないですか。なぜお釈迦さまが教えを説きだしたのかというのは、いろいろな仏教書を見ても、偉い先生方の研究書でも、大した説明をしていない。わからないのです。だから、そもそも梵天に三度懇願されたので、説かざるをえなかったというお話にしたのでしよう。

最近、私はこう考えています。解脱した、そういう境地になった、その中で、きつとお釈迦さまの智慧のまなこには、

人生は苦だとずっと見ていたけれども、そういう苦しみのもとである人間と人間のかかわりの中に、何か大事なものがあのではないか、ということが見えてきたのではないかと。人間関係に対する再評価、表面的には苦しみをもたらす人間関係も、本当は根っこところで大事なつながりがあるのではないか、あるのだろうと思い、それで説きだしたのだと、私は理解しています。それ以外には考えられないという感じですよ。そうして、人間関係に対する否定的な考え方から、教えを説く、という姿勢に大きく考えを転換される。お釈迦さまの根っこにあった人間に対する愛情、人々に対する共感、それが解脱の末に、また現れて来たのです。ただ、お釈迦さまは、そのあと教えを説いていくときには、弟子達には「サイの角のように、ただ一人歩みなさい」と勧めています。

知っておいていただきたいのは、「原始仏教」と呼ばれる仏教でのお釈迦さまの教えは、出家しなさい、戒律を守って、禪定を深め、瞑想して、智慧を磨きなさい、そうすると、解脱とか涅槃という状態が実現しますよ、ということ。解脱は、苦しみから解放されるという意味です。涅槃は、欲望がなくなるという状態です。解脱とか涅槃、彼の目的はそこです。ある意味、非常に個人的で、自己探求に留まる。悪く言えば、自分さえよければいいというか、自分で精いっぱい、自分で目いっぱいなのです。

ただ、お釈迦さまは悟った末に、さらに深まって人へのかかわりに気付いていく、大事さに気付いていく。それを受けて出てきたのが「大乘仏教」だというのが私の理解です。

お釈迦さまは、紀元前四百年前後に亡くなったとされ、それから三、四百年後に新しい運動が出てきます。これが大乘仏教で、私はこれを新興宗教運動だと考えています。今の新興宗教と違うのは、インドの大乘仏教という新興宗教は、自分たちで経典を作ります。これはすごいことです。キリスト教でも、マルティン・ルターとかジャン・カ

ルヴァンという人たちが、いろいろな宗教改革運動をやり、内容もさまざまですが、プロテスタントという大きな運動を始めたときも、新しい聖書は作りませんでした。しかし、仏教の人たちは、お釈迦さまが亡くなって三、四百年して新しい経典を創作していったのです。

もちろん、伝統的な人たちは、「おまえたちの経典はインチキだろう」と言っても、批判しますが、大乘仏教の人たちは平気です。なぜでしょうか。「これを聞いたんだ」、「ちゃんと聞いたんだ」と、彼らは確信しているのです。

ちなみに、経典は「如是我聞」と始まります。日本の人たちは、「このように私は聞いています」と訳しています。「如是」は「真実のとおりに」。ですから「如是我聞」は「このとおり、一字一句間違いないこのように聞いています」という意味です。

さて、仏像の起源についてもお話ししておきましょう。その起原は、紀元一世紀の半ば頃とされています。つまりお釈迦さまが亡くなって四、五百年後のことで、インドのガンダーラとマトゥラーという二カ所でできてきます。亡くなってすぐに作ってもいいのですが作らない、それはやってはいけないことになっていました。それがなぜかはわかりません。

ともかく、紀元一世紀頃、仏像が作られ始め、同じ頃、大乘仏教の経典が作られ始める。その中の一つに般若三昧経があつて、その経典の中では、直接仏さまに会うことをやります。仏像を作つてはいけないというのを作り始め、瞑想で仏さまに会う経典なども作つてしまふ。そもそもそういう考えはなかったのに、それがでてくる。般若三昧経は、見仏経典、仏さまに会う経典と言うのですが、仏さまに会うというのが目的の半分、もう半分は仏さまに会つて教えを聞くというのが大切とされています。

「仏さま」について説明しておきます。お釈迦さまは、釈迦族出身の聖者です。真理をダルマと言います、法で

す。お釈迦さまは、自分は真理を悟って仏陀になった、だから、人がダルマを悟れば仏陀になる、仏陀は自分一人ではないと言っています。ですから、原理的には、悟った人、仏陀になる人はいくらいてもいいのです。そういう思想を背景に、紀元一世紀の頃に、現在もいろいろな世界に仏さまがいるという「現在仏」が登場します。經典にも仏さまがたくさん出てくる。それは歴史上の仏、つまりお釈迦さまではありません。永遠の仏です。お釈迦さま以外は、基本的には永遠の仏なのです。肉体を持ったお釈迦さまではなくて、如来とか仏はみんなそういうものです。お釈迦さまだけが地上世界に降りてきて肉体的、歴史的存在となった。お釈迦さまも如来だし仏でもあるのですが、ほかにも、阿弥陀如来、大日如来とか、大乘仏教にはたくさんのおさまが登場してきます。

お釈迦さまから阿弥陀さまへ、というのは、つまり、歴史上に実存したお釈迦さまという個人から、永遠の仏としての阿弥陀さまという存在へと人々の意識が変化した、ということなのです。大乘の人たちは、瞑想の中で、いう永遠の如来に会い、教えを聞く。だから、如是我聞は彼らにとって本当のことなのです。原始仏教の場合、お釈迦さまから聞いている。大乘仏教の經典では、永遠の如来に瞑想で会って聞いている。大乘仏教の人は確信している。きちんと仏に会って聞いている、と。だから、如是我聞になるのです。皆さんご存じの般若経とか、華嚴経とか、法華経とか、浄土系の經典である無量寿経とか、みんな大乘の經典です。

ところで、この大乘仏教の「大乘」に対して、最近はいませんが「小乗」という言葉があります。これは大乘の人たちが、見くびって小乗と呼んだので、そういう差別語はやめようということ、今は「小乗」とは言いません。上座部仏教とかいろいろな言い方をしますが、向こう岸に渡るのに、一人でカヌーで渡るのが小乗、みんなで乗り合いで行く船が大乘、マハーヤーナ、大きな乗り物です。大乘のイメージはそんなふうを考えておいてください。

さて、大乘仏教の人は何を目指したのか。こういう新しい教理を作った根っこは何だろう。大乘仏教の經典を見

ていると、「一切衆生」という言葉がすくなくさん出てきます。「sarva・sattva」、あらゆる生きとし生けるもの、sarva（一切の、すべての）、sattva（生きもの）です。

「一切衆生」という言葉が大乗仏教の経典の中で出てくるときは、良い意味で使います。一切衆生は欲望を貪っていただく、という言い方は絶対ありません。一切衆生は救済の対象です。ですから、原始仏教には、基本的には出てこないのです。大乗仏教の経典に、一切衆生があまりに多く出て来るので、ふっと思ったのですが、言ってみれば、私がいて、解脱とか、涅槃とか、ダルマ、真理を目指すというのは縦の関係、キリスト教で言えば、神さまと私だけの関係です。

ところが、どういうわけか、紀元一世紀の頃、地中海世界もインドもそうですが、横が気になり出す、一緒に生きていた人たちとのかかわりの大事さに気が付き始める。これは不思議なことで、かなり幅は広いのですが、紀元五世紀前後に、インドだけでなく中国でも地中海世界でも、自己探求が始まります。ヤスパースという思想家がそれを指摘しています。何の関連もなく、紀元前五世紀前後、二、三百年の幅はあるけれども、個人の探求の哲学が始まった、と言っています。

それから五百年ぐらいして、紀元一世紀頃、人は他者に気付いた、自己探求から他者への思いに気が付きます。キリスト教が登場しますが、あれは隣人愛です。まさに人とかかわりを大事にします。それまで、ギリシャの哲学とか旧約聖書はそれを強調しません。友情とかいろいろな議論はあっても、無差別の隣人愛はキリスト教が出てからです。キリスト教の一番大事な教えはそこにあります。

インドでも、仏教の中だけで大乗仏教が出てきたのではなくて、インド思想の全体の流れで、ブラフマニズムからヒンドウイズムに転換していくのが一世紀の頃です。バクティという愛を説きます。基本的には、中国世界も同じ

ことが言えます。典型的には道教が出てきます。救済經典の救済の宗教です。紀元一世紀頃は本当に不思議な時代です。これは誰も言っていないので、私がおもつと頑張つて書いたり話したりすれば、少しは普及するかもしれません。紀元一世紀頃、人類は成熟しました。偉くなったというより、成熟したのです。

こんなふうを考えれば、面白いのではないですか。一人の人間が生まれる、生まれた瞬間、親に愛される、人に愛される、いつか自立する、自我に目覚める、これがお釈迦さまの時代です。こういう自己探求の時期をへて、やがて人を愛することを、それがキリスト教の時代、大乘仏教の時代。人類の歴史は、一人の人間が、それぞれ全プロセスを繰り返し同じようにやっている、という考え方がありますが、大乘仏教の誕生もそれと重なると、私は思っています。

人間は、生まれた時から本当に愛に包まれているのだという実感が生きる上では大切です。そういう意味で、一切衆生、生きとし生けるものどようやって生きていくのかということが、大乘仏教ではとても大事になり、出発点でもある。仏教は智慧と慈悲の教えだ、というのは大雑把すぎます。仏教は智慧の教えだというのは、お釈迦さまの時代からそうです。しかし、仏教が慈悲の教えになったのは大乘仏教からです。お釈迦さまも「慈悲」という言葉を使いますが、これは極端に言えば観法の一種で、頭の訓練のようなものです。

大乘仏教ではいろいろな經典ができます。皆さんご存じの般若心経、私たちの經典である阿弥陀経とか無量寿経とか、あるいは法華経とか、と。こんなに色々あるのはなぜかという、大乘仏教は教祖がいないのです。たとえば、こちらの人が、九州辺りで新しい運動だと法華経を作りました、あちらの人が、北海道辺りで般若経を作りました。何となく影響はあるのでしょうか、お互いに連絡なしです。だから、教理が違います。私の理解では、共通しているのは、他者とどう生きていくか、人とのかかわりを大事にしていこうというふうに変換が起きて、

それをベースにしていろいろな教理を作っていく。お釈迦さまの教えを受け継ぎながら、お釈迦さまが、ただ一人歩みなさいと言った、そこをひっくり返してしまう。

一切衆生、生きとし生けるものをどうにかしよう、というので、一番典型的な経典が無量寿経です。私たちの真宗では、无量寿経だけでなく、観無量寿経、阿弥陀経を「浄土三部経」と挙げますが、親鸞聖人は、特に无量寿経がお好きです。无量寿経は、一切衆生を救済するという意味では一番明確な経典だと、私は理解しています。

大乘仏教は大きく分けると、二つのタイプがあります。例えば、般若経はいろいろな般若経がありますが、あれは、私たちが菩薩になって利他行に励もうという経典です。もう一方では、阿弥陀さまが出現して来て私たちを救ってくれるという経典もできます。无量寿経などが、浄土の教えの典型的なものになります。究極的には、解脱でも涅槃でもない、「得阿耨多羅三藐三菩提」、菩提を完成するところでは共通していますが、この共通部分が大事なところだと思います。

さて、原始仏教から大乘仏教へという流れをご理解していただいたとして、これからは親鸞聖人が書かれた「正信偈」あるいは「正信念仏偈」についてお話ししましょう。

正信偈というのは、六〇句一二〇行からできている詩文で、「教行信証」の巻末に付いているものです。正信偈の最初のところを読んでみましょう。

「帰命無量寿如来、南無不可思議光」

無量寿如来は阿弥陀さまの別名です。「無量寿如来に帰命いたします、不可思議光に南無いたします」、南無は帰命と同じで、お任せします、帰依いたしますので、私たちに一番大事な言葉です。これはどういうことかという、遠い昔、

この宇宙が始まる前のもっと昔、法蔵菩薩という人がいました。法蔵菩薩は、世界を見て、一切衆生、生きとし生けるものが苦しんでいるのを見て、彼らすべてを救ってしまいたいと、世自在王仏という仏さまの前で誓うのです。この誓いを実現できない限り、自分は、仏になる資格があっても仏にならない。それで、とうとう法蔵菩薩は阿弥陀さまになりました。

法蔵菩薩は阿弥陀さまになって浄土にいらっしゃるということです。さて、では私たちはどうなったか。阿弥陀さまは一切衆生を救う、という誓いを立て完成した、実現した、だから、浄土において、「おいで、おいで」と言っている。だから、救っているのです。信じようが信じまいが、背を向けようが何だろうが、全部救っている。これはすごいことでしょう。

阿弥陀さまはこう言っています。今、西方浄土において、本願力を送り続けてくださっているということです。働き続けているのは光です。光を届けている、これはとても大事なことでしよう。太陽、お日さまがあります、そのお日さまがなぜ大事か。暖かさや明るさを私たちに与えてくれるからで、そこにお日さまが存在する意味があります。私たちの気付かないときでさえ、光と温かさを送ってくれている。それと同じように、阿弥陀さまも、西方浄土において本願力をずっと働き続けています。

#### 四句目は

「建立無上殊勝願 超発希有大弘誓」

法蔵菩薩は、菩薩だったとき、まれなるすばらしい誓願を立てた。超発は、ほかの仏さまを飛び越えたすごい誓願を立てた、ということ。その誓願を実現して、今は西にいる。

無量寿経にも、基本的には同じことが書いてあります。十一句目、「如来所以興出世 唯説弥陀本願海」、釈尊が

この世に現れた理由は、ひたすら、ただただ阿弥陀さまの本願、海のごとき深い広い本願を説くためだったと、親鸞聖人はおっしゃっているのです。一切衆生の救済を、本当に本格的に説いた経典はこの無量寿経、阿弥陀さまの教えです。

十五句目、「摂取心光常照護」、摂取は、私たちを救い取っているという意味。阿弥陀さまの摂取しようというお心が光となって、私たちを常に照らしてくれているのです。これに続く「已能雖破無明闇 貪愛瞋憎之雲霧 常覆真實信心天」、無明にまみれている私たちは気付かなくとも、欲望を貪っていても、霧に覆われていても、それでも阿弥陀さまは光で照らしてくれている。

他力本願の本当の意味は、阿弥陀如来が、そういうふうになら私たちを救済すると誓って、それを実現して、今、西方浄土において、その願いの力を今でも送り続けてくれている、守り続けてくれているということなのです。

ここで、「歎異抄」を見てみましょう。親鸞聖人のお弟子であった唯円という人が聞き書きしたものです。第一条の書き出し「弥陀の誓願不思議にたすけられまひらせて」というのは、不思議な阿弥陀さまの誓願に助けていただいているということです。先ほど、法蔵菩薩が立てた無上殊勝願、希有大弘誓のことです。

浄土真宗では、あるいは宗学、教学的には、本願は真実の願いという意味ですが、言葉だけで言うと、本願は、過去世に立てた誓願という意味です。遠い昔に立てた誓願です。だから、法蔵菩薩のときは本願とは言いません。法蔵菩薩の場合は、まだ実現していないので誓願と言います。

これに続く「念仏申さんとおもひたつころのおこるとき」とは、念仏を申そうかなと思いついたときに、その瞬間に、「摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり」というのです。私はこの「摂取不捨」という言葉が好きです。「摂

取捨不捨」とは、救い取って捨てない、決して見放さないということです。すばらしい言葉ではないでしょうか。他力本願の本当の意味は、阿弥陀さまの本願の力です。それが、私たちを既に救ってくれている、それは摂取不捨だということです。いくら皆さんが悩んで、一人ぼっちになって、もう死んでしまいたいと思っても、阿弥陀さまは摂取不捨だということです、決してあなたを見放さないと断言してくださっているのです。

苦しいと一人で思っ、みんなに見放されて助けてくれない、もうどうしようもないというときに、「南無阿弥陀仏」を唱える唱えないは別にして、じっと見守ってくださっている。「おまえさん、安心して悪あがきしなさい」と言ってもらえるようなものです。最後まで、どんなことがあると、私は決しておまえさんを見放さないよ、と。

人間同士でもこういう約束をしたのですが、人間は、残念ながら、欲望などいろいろあるから難しい。しかし、私は、人間同士でもそういうふうに誓い合って生きていきたいなと思います。阿弥陀さまと私の二人だけだとさみしいじゃないですか、みんな、人間同士ももつとつながりたいのではないですか。

今日の話の中で、この「摂取不捨」だけは忘れないでください。苦しいときには、摂取不捨だと。阿弥陀さまがいるかどうかかわからないけれども、きつと摂取不捨だと実感して、すくと何かが抜けたらうれいいます。

大事なことは、阿弥陀さまの本願力が今でも働いている、永遠に働き続けている。この本願力の働きを受け止めることが、信心をいただいているということだ。だから、信心はいただいたものだと。働いているものをキヤッチするだけです。私たちが、あれを信じよう、これを信じようというようなものではありません。いただいている、それをこちらが受け止めている状態を、信心をいただいている、と。そういう意味では、「何か聞いてくる」などの日本語の受動的表現は非常に大事だと思います。人間の判断、力を超えて、阿弥陀さまの本願力を

あるがままに受け止める。いただく、というのも受け身であつて、人間は、根本的には受け身の在り方をしていると私は思います。

信心をいただくというのはすごいことですが、どうしたら信心をいただけるのかというと、それはなかなか難しい。信心をいただけるのと念仏が自動的に出てくる。では、念仏を唱えれば信心をいただけるのかというと、なかなかそうもいかないらしい。難しいですね。

阿弥陀さまの不可思議な光は、どんな障害にも妨げられずに、私たちの心のいろいろな煩惱にも妨げられず、私たちに注いでいる。阿弥陀さまのことです。歸命します、南無します、とはすごいでしょう。阿弥陀さまが、本当にそうしてくれているなら、すべて任せてもいい。すべて任せる。歸命は、そのくらい絶対的なすごいことなのです。歸命は、阿弥陀さまの「もうおまえを助けているよ、いらっしやい」という呼びかけの言葉です。それに、私たちが「ありがとう、ございます」とこたえていくのが念仏です。

浄土真宗は、基本的には、信心をいただいで念仏を唱えながら生きていくということですが、日本では、死んだら浄土に行くことを願っているだけだろうと誤解されます。私たちの浄土真宗では、信心をいただいで、念仏を唱えて、そういう個人的なところで完結するのではなくて、阿弥陀さまが一切衆生を救済してくれている中で、社会的にどう生きていくかも大切になっています。

「自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献する」というのが、浄土真宗本願寺派の一番大事な「宗制」の前文に書いてある言葉で、この宗門の目的みたいなものです。念仏申す人生を送るだけでなく、さらに、自他ともに心豊かに生きていくことのできる社会の実現に貢献するということです。「自他共に」、これもなかなか難

しいことですし、心の豊かさっていったい何だろう、本当の豊かさって何だろう、そういうことを考えながら、私たちは、生きにくい社会を生きていくのに、いきいきしていけるような社会を実現していきたい。

そのために、私たちの立場としては、阿弥陀さまの智慧の光に照らされて、自分の煩惱の深さ、自己本位なあり方をありのままに見つめ、また阿弥陀さまの慈悲に光に照らされ、みなともに慈悲の中で生かされつつ、人と人がとともにより豊かに生きていこう、そういう社会の実現のために力をつくそう、そういう生き方をしていきましよう、ということなのです。

ご清聴ありがとうございました。

〈キーワード〉

原始仏教、梵天勧請、大乘仏教、一切衆生、自他共に